図画工作・美術

豊かな造形体験をいかし，自分らしい表現を追求する図画工作・美術科学習

－　思いをつかみ伝え合う中で思考力•判断力•表現力を育て高める　－

1　図画工作・美術科で願う豊かな学びの姿

図工ではねん土とはりがねを使って，自分の春トレ中のポーズを作るというものです。私のポーズは30，40％のスピードから150％のスピードを出すレースで，すごくつかれていて完走したアノ時をイメージしました。最初ははりがねだけだったころがあったけど，そうとう変わり，すごくリアルにできました。私は今，服を着せるところをしています。服は，しわを表現しました。あと，風が前からふいたとき，服も後によるので，そこを表現しました。楽しかったです。

（小学5年　児童）

初めはダンボールだけで「花」をつくるのは難しいと思っていましたが，ダンボールには種類がたくさんあるということを知り，さまざまな表現をすることができたり，ライナーの大きさの違いなどダンボールの表情を見つけていくうちに，どんどんイメージが沸いてきたりしました。楽しかったです。

（中学2年　生徒）

上記の文章は，小学5年の児童は「ただ今春トレ中！動きを紙ねん土で表そう」の学習後に，また，中学2年の生徒は「ダンボールの可能性を見つけよう」のふりかえりで書いたものである。小学5年の児童は，春季トレーニングで体験したことを想起したり，友だちと動作化したりしながら，自分が表したい人物の動きやその動きから生み出される形を意欲的に見付け出そうとしている。中学2年の生徒は，ダンボール素材の特徴や種類の違いによる形の違いや，ライナー部分の重なりから生まれる模様のデザイン的な面白さを探し出し，「花」という表現テーマに迫ろうとしている。グループで試作作品を鑑賞し合い，工夫しているところやアドバイスなどを伝え合うことによって，作品の本製作に生かすことができた。

どちらの子どもも，自分が表したいものやことについての考えを大切にしたり，新たな発想を獲得するために友だちの力を借りたりしながら，表したいことをよりよくするために，感性を働かせて選択し，活用しようとする姿がある。

本学校園図画工作・美術科では，「豊かな造形体験をいかし，自分らしい表現を追求する図画工作・美術」として，自分や他者の思いをつかみ，伝え合うかかわり合いの中で，より豊かな表現を追求していく授業づくりに取り組んできた。そこで，幼小中一貫教育における11年間を通して育む具体的な学びの姿を次のように定義する。

○　体験から感じ取り，体験をいかして自分らしい表現を追求しようとする姿

○　互いの考えを伝え合い，自分や仲間の表現を発展させようとする姿

体験から感じ取り，体験をいかして自分らしい表現を追求しようとする姿については，造形活動において子どもが自分の思いや欲求，願いなどを色や形に表すことをねらいとする。学齢期の子どもの多様な表現が可能であることが図画工作・美術科の教科性を特徴付けている。また，幼児期においては遊びや生活そのものが，体全体の感覚を働かせて行われる多様な表現であると言える。

互いの考えを伝え合い，自分や仲間の表現を発展させようとする姿については，子どもが遊びや造形活動をする過程や，その結果から見つけ出した表現のよさや面白さ，そのよさや面白さを支えている取組のよさを見付け出すことをねらいとする。そのよさは会話や文章などの言語活動，時として図や絵，実演などによって伝わり，共有され，評価される。

2　昨年度までの研究の経緯

⑴ 図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力

図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力を以下のように考える。これらすべての能力は図画工作・美術では分断されることなく，一体化し，造形活動の中で自然に働いていく力であると考える。

●「思考力」とは，

表現したいことに迫ろうとする時，直感的にまたは論理的に言葉や図・イラスト等を使って物事を考える力である。また，言いたいことがはっきりしない場合など，色や形や図に表して整理しながら考えることがある。このとき，思考と判断と表現は一体化して働いている。表現や鑑賞に関わって，直感的に感じたり，データに基づいて推測したり，情報を分析・評価・論述することも思考力が働く場であるといえる。

●「判断力」とは，

感性を働かせて対象と向き合った時，様々な直感や思考等による発想を通して，自らのイメージを練り，表現することを決定する構想へとつながるものとして働く力である。また，表したいものに合わせて材料や用具，手段や方法を適切に選択する力であり，鑑賞の場では美しいと感じたり興味をもったりする力も感性的な判断力といえる。色や形から意味を感じ取ったり，イメージしたことをもとに，表現の意図や作者の意図を読み取ったり，友だちの言葉など自分にはたらきかけてくることに対して，理解したり，必要に応じて取捨選択したりする力であるといえる。

●「表現力」とは，

形や色を通して自分が見たことや感じたことや表したいことを表す力であり，図画工作・美術ではこれまで特に強調されてきた能力であり，教科の特性を強く主張するところである。また，自分を表すことだけでなく，自分を他者や社会とつなぐ広義での「コミュニケーション能力」そのものであるといえる。

幼稚園には教科としての取組はないが，遊びや生活の場において子ども同士のかかわり合いを意識して，環境を構成していくことが大切であると考える。どの発達段階においても子どもは自分の考えや追求の仕方などを積極的に表現し，伝えていくことができる。また，友だちのそれと比べながら，そのよさに気付き，そのよさを自分に取り込み，見直す中で，さらによりよい追求の仕方を見出したり，自分の考えを広げ，深めていったりできると考える。初等部前期の教科に体系付けられた学習では，自分自身の感じ方に気付いたり考えをもったりする中で，自分の思いや考えを色や形に表していく。初等部後期は自分が見いだした課題について構想を立て，表現の意図を説明したり構想についての考えを交わしたりして，自他の表現を評価・改善していく。中等部では表現意図や課題について構想を立て，実践する。そして，ものの見方や考え方，自分や他者の気付きなどを説明する場を通して，構想に沿った評価・改善をしていく。一貫教育における11年間のつながりから思考力・判断力・表現力をとらえ，各発達段階を大切にした学習指導を目指したい。

⑵ 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

①　個と集団をつなぐ学び合い

新学習指導要領で述べられている「言語活動の充実（相互に評価，論述すること）」は図画工作・美術科においても大事にしたい。造形体験や試行錯誤の活動から見出された一人一人の考えや追求の仕方を，学級全体の場に出し合い，共通の視点に基づいてその造形表現のよさや追求の仕方のよさを学び合う。個人思考と集団思考をつなぐ教師のはたらきかけにより，学級

全体の学び合いを豊かにする。また，子どもたちがより質の高い表現の追求に向かうことをねらい，次の3点を大切にして単元の構想を行う。

(ⅰ) 互いの造形表現のよさや追求の仕方のよさを伝え合い，学びを深めたり広げたりする「学び合い」を工夫する。
(ⅱ) 自分の追求の深まりや広がりに気付かせ，以後の学習やくらしにつなげていくようにする「ふりかえり」を工夫する。
(ⅲ)「学び合い」と「ふりかえり」を連動させることにより，主体的な学びの姿を自覚させるようにする。

個人思考の視点では,周囲の環境などの「場」や素材などの「もの」とのかかわり合いを通して，更に，自ら体験し，習得して「こと」とのつながりの中で，思考力•判断力•表現力は培われていく。集団思考の視点では，他者の表現活動やそれによる造形物とのかかわりの中で，発見や気付きを新たに獲得し，さらに創造性豊かな表現を求めていく。他者との深いかかわり合いの中で獲得される経験は造形表現にも大きな影響を与える。言語活動を伴う友だちとのコミュニケーションなどは，他者の経験を追体験したり，新たな気付きを獲得できたりするという点で有効であると考える。

② 評価を生かした教師のはたらきかけ

「体験から感じ取ったことを表現すること」「課題について構想を立て，実践し，評価・改善すること」「互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させること」を，学習活動の中に明確に位置づけて展開させていく。授業の中で，相手に自分の意図を伝えるという活動を充実させていくことにより，子どもは自ずと自身の意図が明らかになり，新たな表現の可能性を発見するに至ると考える。教師は子どもの学びの姿やその評価を生かし，子どもの学びを詳細にとらえ，授業を改善し，「掘り下げる」または「提案する」はたらきかけに反映させることにより，子どもの必要感に応じて手立てを講じることができると考える。学び合いにおいても論点を整理し，新たな発想や構想につなげやすいはたらきかけができると考える。

そのために，教師が子どもの学びをより深くとらえるということ，すなわち，子どもの考えが生まれる根拠や理由を明らかにし，つかみ取ることが，子ども自らが学びを「拓き」，より豊かな造形表現に迫る学習活動を展開させる「ねらい」にも有効に働く。思考力・判断力・表現力の育成につながると考える。

⑶ 思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力を育成する観点にしたがって，各題材や小単元ごとに子どものふりかえりや自己評価を充実させる。作品から見取ることのできる造形表現の変遷を画像により集積し，表現主題に沿った発想や構想を図示や言語化により集積する。それらを元にしたポートフォリオによる評価を行うことにより，子ども自身が自分の学びの高まりをとらえられる手立てを構築したい。このポートフォリオに集積された記録は，学び合いの中で子どもの思考や判断がどのように変容したのかを,指導者がとらえる上でも有効な評価資料となりうると考える。授業場面での子どもの気付きに関する言葉や活動の様子からは質的な評価を，また，授業後のふりかえりや評価アンケートからは，より客観的で量的な評価を行う。

3 本年度の研究

⑴ 思考力・判断力・表現力を育てたかめるための授業づくり

昨年度までの研究から，言語活動や試行錯誤を取り入れた学習活動によって，表現主題など

について意識化を図ることにより，次第に考えがまとまり，漠然としていたイメージが明確になり，発想が高まったり構想が深められたりすることができると考える。

そこで，題材や単元を構想するに当たり，試行錯誤の取り組みによって積み上げられた経験や気付き，一人一人の考えや追求の様子を学級全体の場に出し合い，共通の視点に基づいてその造形表現のよさや追求の仕方のよさを学び合うことができるようにする。集団思考と個人思考をつなぎ，学び合いの場を活性化させる。子どもたちが考えを出し合い，かかわり合うことで，自らの追求を深め，意欲を高めることができるようにする。学級全体で学んだことを，今度は自分自身の造形表現に取り込むことができるように，整理し，広げたり，深めたりできるような教師のはたらきかけを行う。

(2) 学んだことをいかすための単元構想

本年度の研究の視点「学んだことをいかす」について，図画工作・美術科では「豊かな造形体験をもとに，自己実現としての自らの造形表現を展開させ追求する姿」ととらえた。それは，単元の中で素材体験から表したいことを発展的に見出す姿であったり，題材を超えて学んできた知識や技能を活用しながら，表現テーマに向かって自己の造形表現を追求する姿であったりする。これまでの研究で積み重ねてきた学び合いのあり方や評価のあり方，教師のはたらきかけのあり方を生かして，思考力・判断力・表現力を育てていきたい。

そのために，素材や表現方法などについて，これまでに体験したものも含めてくり返し試し，取捨選択する機会を単元の中に明確に位置付ける。発想や構想が広がり深まることで造形表現への意欲が高まり，表現テーマについて発展的な展開や活用が期待できる。また，子ども自身が表したいことの意図や考えを明確にするために，また，その考えが導き出された根拠などを明らかにするために，文章で「書く」こと，考えや意見を「聞く」「話す」ことなど言語活動に重点を置くとともに，その成果として明らかにされた表したいことがらを，絵や立体に表すことにつなげ，造形表現として発展的に展開させる。これらの取組により，学びを「拓く」子どもの姿を追究し，思考力・判断力・表現力の育成を図る。

4　成果と課題

図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力を11年間のつながりからブロックごとに整理してとらえ，その育成を図ってきている。幼児期の遊びから培われる造形表現活動の基盤を受けて，小中学校で系統的に発展させて高めていきたい発想や構想の能力として，より具体的に教育研究ブロックごとに願う子どもの姿をイメージすることができた。この力を中心に据えてより豊かな造形表現を追求するためには，学習場面での学び合いが重要であり，その評価のあり方や，評価を受けた授業の改善をさらに進めていくことが課題である。

評価規準の作成に当たっては，子どもの表現の追求に応じて,「題材の評価規準」だけでなく,より詳細な「学習活動に即した評価規準」を設定することも考えたい。単元題材配列表に示したように，各題材や単元を構想するに際しては，具体的な評価場面や子どもの姿を想定した評価規準を作成することで，思考力・判断力・表現力を評価する手立てとしたい。表現のプロセスをより詳細に把握することは,図画工作・美術科において子どもの思考や判断をとらえる上でも有効な評価方法であると考える。　（文責　三桐　摂夫）

【参考文献等】
中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2010)『児童生徒の学習評価のあり方について(報告)22.3.24』
文部科学省(2010)『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力,判断力,表現力等の育成に向けて～22.12』
国立教育政策研究所教育課程研究センター(2011)『評価方法等の工夫改善のための参考資料23.3』